

「うたたね」 引歌考

重松裕巳

『うたたね』は「十六夜日記」の著者阿仏が、安嘉門院に出仕していた若いころ（十七・八歳）経験した、ある男性との約一年間にわたる恋の始終と、破局後の行動・心情とを綴った作品である。墨付二十二枚（東山御文庫本、次田香澄解説）、笠間書院刊「うたたね」によれば約二十三頁の小冊子ながら、自照性の強い内容、先行作品をふんだんに引用撰取し、かつ情景描写も確かな文体、回想・日記・紀行をなймаぜた構成など、なお論ずべき問題を含んでいるが、ここでは古典撰取の一端に触れ、私見を述べてみよう。

次田香澄氏の指摘（講談社刊「うたたね」）にあるように、恋人・養父・乳母の主要人物についての描写はきわめて抽象的、観念的で、性格も人物像もともに不鮮明、杳としてつかみどころがない。これに反して、作者自身については「にや」の臚化法を多用しているにも拘らず、その性格や行動は容易に把握できるし、又、鬪房から一步脱け出した世界の、桂の里人や洲俣の渡しの男の描写になると実に活き活きとしていて、別人の筆を思わせる。その理由

として同氏は (イ)作者の人物関係よりも自己の恋愛感情の推移そのものに焦点をおいたから (ロ)作者の目がまだ稚く身辺の重要人物については客観的に見すえる能力が不十分であったからの二点を挙げておられる。私見としては(イ)には賛同できるが(ロ)は首肯し難い。むしろ作者のねらいが作品の物語化にあって、それが未熟に終わっているからだと思う。

その物語化の一つに、古典の引用や歌語・慣用句の多用がある。これまでに指摘されている、本書に引用された先行作品を列挙すると次のとうりである。（「次田香澄『うたたね』講談社」と「福田秀一『中世女流日記』武蔵野書院」とを参照し私見を加えたもの）

新古今集七、源氏物語六、古今集五、伊勢物語三、拾遺集三、後拾遺集二、千載集二、白氏文集二、大和物語・平家物語・古今六帖各一、計三十三、その他源氏物語をふまえていると考えられる五個所を加えると、総計三十八個所となる。そしてこれら先行作品や慣用句・歌語の使用

は、主として回想・逢瀬・心情表白の場面に集中している。このような伝統的手法は、幻想的・艶夢の世界を描き出すせはするが、反面登場人物の具象性を欠く結果を招来する。しかし「うたたね」の作者は、己を王朝物語の世界に遊泳させたかったものと思う。それは、やや自己陶酔的きらいのある、冒頭から二十行も読みすゝめば明らかであろう。

(具体例をあげて説明すべきであるが紙幅の都合上すべて割愛した)

次に、参照した

○次田香澄・渡辺静子校注

「うたゝね・たけむきが記」笠間書院(以下「笠間」と略称)

○次田香澄全訳注『うたたね』講談社文庫(以下「講談」と略称)

○福田秀一・塚本康彦編

校注「中世女流日記」武蔵野書院(以下「武蔵野」と略称)

に示されていない引歌六首を挙げて大方の批判を仰ぎたい。以下の引用は笠間書院刊「うたゝね」を使用した。

二

(一) ものおもふ事のなぐさむにはあらねども、寝ぬ夜の友
とならひにける月の光まちいでぬれば、例の妻戸をしあ
けて、たゞひとり思いだしたる——(二二頁一行)

あの方との愛の苦しみや哀しみが慰められるわけではないのだけれども、こうすることが私の習いとなってしまつた。寝られぬままに月の出を待ち、妻戸を開け、見るともなくぼんやり外をながめる。

△諸注▽講談社「ものおもふ事」愛人との恋愛に關していう。

笠間・武蔵野「なし」

本書の冒頭である。一体に作者が筆を執るとき、作品の様式を問わずその冒頭に腐心することは自明のことである。ましてや本書のように古典の引用や慣用語、歌語などで文章を凝らした作品においては、発端や場面の転換箇所等には引歌や本説が採られていることは必定と考えてよい。

「武蔵野書院刊」には

拾遺集 雜上 大江為基(新撰朗詠)

めにおくれて侍けるころ、月を見侍て

詠むるに物思ふことの慰むは

月はうき世の外よりやゆく

を引歌として挙げる。この歌は「女の哀傷に世を恨む比月を見てしばし慰む心を(八代集抄)」よんだもので、たしかに本書の「ものおもふ事のなぐさむ」の本文と合致し、「うたたね」の作者は「古歌には月をながめることで物思ふことが慰むと言っているけれども私には却って物思ひの種となるのだ」と、拾遺の歌を逆手にとつたものと理解すればよい。ところが、これを本歌にして西行は次の歌をよんでいる。

山家集 恋 六四八 (新後撰・秋下・題不知)

ながむるに慰むことはなけれど

月を友にてあかす比哉

「ながめっていると悲しみを誘われるばかりで、慰さむこと

はないのだが、やはり月を友として過ごすこの頃だ（古典大系本）の意で、これだと別に一ひねりすることもなく本書の冒頭にそのまま置くことができる。もつともこゝも重なってしまふと、引歌の面白みがなくなってしまうかも知れない。

(二) 神無月にもなりぬ。降りみ降らずみさだめなきころの空のけしきはいと袖のいとまなき心地して、おきふしながめわぶれど、絶えてほどふるおぼつかなきの、――

(二二頁十行)

十月にもなつた。古歌によまれているとうりの、降つたり降らなかつたりの不安定な空模様は、私の袖も涙で乾くまもない心地で、寝ても覚めてもあの方への思いに堪えかねているのに、お便りもお訪ねもすっかりと絶えてから日数が経つ不安――

△諸注▽講談社―絶えて程ふる〓訪れが絶えて時日がたつ

笠間・武蔵野―なし

この前後は引歌や歌語の羅列である。

新古今集 夏 藤原定家

五月雨の心を

玉ぼこの道ゆく人の言伝も

絶えて程ふる五月雨のそら

道ゆく人も絶え、あの方からの伝言もぱつたりと絶えて日数が経つた。そしてなほ降り続ける五月雨の空。定家の歌は本歌（恋ひ死なば恋ひも死ねとや玉ぼこの道行人に言

伝もなし 拾遺・人麿)の恋を夏によみかえたものであるが、心はやはり五月雨のころの鬱屈した女心をよんだ恋の歌である。そして本書は、さらに定家の五月雨を時雨の季に替えることによつて、定家の歌をむこう側に押しやつた。そこに「うたたね」の才気を認めるべきで、次第に間遠になつてゆく恋人の便りと訪問を待つ作者の不安と焦燥は、定家の歌と同様に「起き臥しながめわび」「絶えて程ふるおぼつかなき」「世の心細さ」「飽かず悲し」と畳み込むような措辞に十分汲みとることができる。

△いまさら身の憂さもやるかたなく悲しければ、今宵はつれなくてやみをまし、など思ひみだるゝに、例のまつほど過ぎぬるはいかなるにかと、さすが目もあはず身じろきふしたるに―― (二五頁十三行)

いまさらながらわが身に対する不満もどうしようもなく悲しいので、今夜はあの方が見えてもそつけない態度で押し通そうと、あれやこれや気持の整理がつかぬうちに、いつものように約束の時刻が過ぎてしまったのはどういふことだろう。もしやおいでにならないかも。やはり当にできないのだわと思うものの、寝もせず身じろきながら臥して

△諸注▽講談社―例のまつほど いつもの来る予定の時間

笠間―まつほど

来る予定の時間

武蔵野―なし

「さすが目もあはず」の「さすが」は、「今宵はつれなく
てやみなまし」と「目もあはず身じろぎふしたる」とをつ
なぐ詞とも解されるけれども、

後拾遺集 雑二 馬内侍

こむといひてこざりける人の暮にかならずといひて待りける
返事に

待つ程の過ぎのみゆけば大井河

頼むる暮も如何とぞ思ふ

△馬内侍集 人ようさりこむとてこざりしを其の懈りをも知らむ
とてようさらは必ずとあるに▽

おいで下さると仰言つた御約束の時間は空しく過ぎてゆ
くばかり。この調子ですと暮には必ずとの御約束もさあど
うかしら。もう当にできませんわ。

この馬内侍の歌を介在させて、「いかなるにか」は「ど
うなることか。(古歌のとうりだわ)今宵の約束も又、空
だのめでは。もう当にしない方が」と理解したい。とすれ
ば、「さすが」は「いかなるにか」を直接受けて「当にで
きないとは思ふものの、それでもやはり」の意となろう。

四 いとどかきくらす涙の雨さへふりそひて、来しかた行
くさきも見えず、思ふにも言ふにもたらず、今とぢめ果て
つる命なれば、身のぬれとをりたること、伊勢のあまにも
越えたり。

(三十頁十二行)

△諸注▽笠間・講談社・武蔵野一なし

西山へ出奔した作者は、雨の中で山路をさまよう。——降
りしきる雨に、涙まで降りそって、来た方角も進んでゆく
方角も見えない。このつらさ苦しきは、心でも言葉でも表
わし尽くすことはできない。今はすっかり覚悟したわが命
だから——

後拾遺集 雑三 伊勢大輔

おもふにもいふにもあまる事なれや

ころものたまのあらはるゝ日は

右の歌は、夫の高階成順が出家を決意し、麻衣が届いた
折に妻の伊勢によみやつた歌——今日としも思ひやはせしあ
さ衣涙の玉のかゝるべしとは——に對する返歌である。歌意
は、心でも言葉でも表わし尽くすことはできません。あな
たが悟りの道にお入りになる日(私達夫婦の縁が切れる日)
のつらさ悲しさは。悲しさは苦しさとともよい。「思ふ
にも言ふにもたらず」と「思ふにも言ふにもあまる」とは
一見反対の意を表わすようだが、「百分表わし尽くすこと
は不可能」といふ意味においては同義である。「思ふにも
言ふにもたらず」の歌語は検出することができます。「思ふに
も言ふにもあまる」の例は、他に二例(狭衣物語・新拾遺集)
認めることができる。たしかに「たらず」は雅語ではない。

四 さりとてとどまるべきにもあらねば、出でぬる道すが
ら、まづかきくらす涙のみ先にたちて、心ほそくかなし

きことぞ——

(三八頁十三行)

△諸注▽笠間・講談社・武蔵野ーなし

出家は遂げたもののな心のお安らぎはほど遠い。「誘ふ水あらば」という心境にある作者は、養父のすゝめに従つて遠江へ行をとにもにする。——そうかと言つて今更、遠江下向を中止するわけにもいかないので、出てゆくその道すがら、別れの悲しさの涙ばかりが先にたつて、心細く悲しいことは——

新勅撰集 羈旅

源家長朝臣

別の心をよみ侍りける

別路をおしあけ方の楨の戸に

まづさきだつは涙なりけり

別れを惜しむ明け方、楨の戸を押し開けていよいよ出発しようとするとき、まづ先に立つものは別離の悲しさ心細さの涙であるよ。

「とはずがたり」で東国行脚の途次作者二条が、惟康親王をお見送りする場で「いづ方につけてか少しもいるがせなるべき御ことにはおはしますと思ひつづくるにもまづ先立つものは涙なりけり(巻四)」と表白している。あるいは別離の際の慣用的言い方であったとも考えられるが、「別離」「まづ」「先だつ」「涙」の用語と、新勅撰以外に用例を見い出せない点から引歌として考えたい。なお「とはずがたり」と「うたたね」との親縁性については稿を改めて論じたい。

六

都の山をかへりみれば、霞にそれとだに見えず、へだり行くもそぶるに心ほそく、何とて思ひ立ちけんとかやしきことかずしらず、とてもかくてもねのみ泣きがちなり。

(三九頁五行)

△諸注▽講談社ーあであつてもこうであつても

笠間・武蔵野ーなし

古来、東への旅行者は逢坂の関を越えて初めて旅情が身についたという。——都の山を振りかえると折からの雨に霞んではっきり見えず、次第に遠ざかっていくのも何とも心ほそく、どうして思い立ったのだろうと後悔されること多く、いずれにしても声をたてて泣きがちである。本来ならば「とかく」とすべきところを、「とてもかくても」というやゝすわりのわるい成語を使ったのは、恐らく次の歌によるものと思う。

新古今集 雑下 蟬丸

世中とはともかくても同じこと——

宮も葦屋も果しなければ

この歌が、和漢朗詠集・俊頼髓腦・今昔物語・和歌童蒙抄・古本説話集・江談抄・無名抄等に「逢坂の関・博雅・琵琶」として広く語り伝えられていることはことわるまでもない(本書四二頁にも引用)。もちろんこの地は逢坂の関を越え、すでに東路に入った近江国の野路であるけれども、今越えてきた逢坂山の縁語的用法としてここに効かせたものであろう。

以上